

みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 21 No.2

(通巻73号)

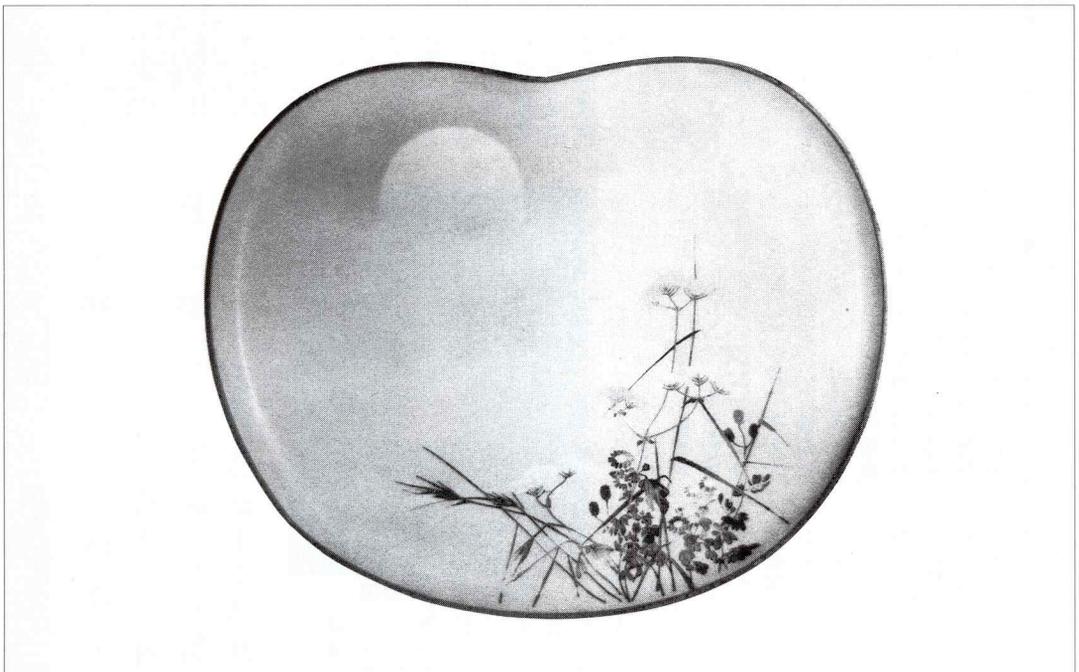
平成6年7月20日発行

編集・発行人 木村 卓

〒260

千葉市中央区中央港1丁目10番1号

☎043-242-8311 (代表)



なみかわそうすけ

涛川惣助 「七宝秋草囀盆」

(特別展「房総の美術－昨日から明日へ－」出品 東京芸術大学芸術資料館蔵)

七宝による絵画的表現をめざして、省線七宝を考案した涛川惣助(弘化四年〜明治四十三年)の作品です。

団扇形の盆に、秋草と臘月が表現されています。草の茎と一部の花を除き、全体は省線七宝で仕上げられています。七宝は、本来金属線(植線)を素地に焼き付け区画をつくり、釉を差し込んで色分けします。しかし省線七宝は、植線を除き、釉間の仕切りを無くしたため、釉が混じり合い、この作品のような色彩の濃淡や暈しなど日本画のような表現が可能になりました。当時この省線七宝は、「絶テ嵌筋ヲ見ス瑩然玻璃中ニ真成ノ描画ヲ觀スルノ想アリ」と評されています。作品の裏は、銅有線で桜の花を一面に散らせ、中央に号の魁香を表す「梅鉢に魁」の銘が入っています。涛川は、下総国海上郡鶴巻村(現、海上町)に生まれ、明治十年第一回勸業博覧会で七宝を知り、制作の道を目指しました。その後、ドイツ金工博覧会・パリ万国博覧会をはじめ、国内の博覧会でも数々の受賞をし、同二十九年帝室技芸員に任命されています。

(前川 公秀)

みる

開館20周年記念特別展

房総の美術

―昨日から明日へ―

第一部 (洋画・版画・彫刻)

7月23日(土)〜8月28日(日)

第二部 (日本画・工芸・書)

9月3日(土)〜10月9日(日)

本展は、開館二十周年記念展として開催します。昭和四十九年十月二十三日に千葉県立美術館は開館しました。当時、県立美術館としては、早い方の設立でした。以来二十一年の間、この館報の表題になっている(みる・かたる・つくる)をモットーに、総合的で調和のとれた美術館活動の実現のため、地域美術館としての立場と役割を模索してきました。そして「房総と近代美術」を基本テーマに、房総というローカルな窓からナシ

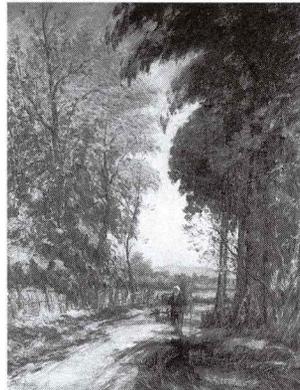


鈴木月潭「残雪」

た。それ故に、明治以降西洋美術の振興と伝統美術の革新という近代日本美術の流れは、房総にそのまま導入され、受け継がれて行きます。そして、房総の美術の形成過程において、多くの作家が存在しました。かれらは、大別して房総で生まれ育った人たちと、他県から

ヨナル、インターナショナルに連なる視点で美術の世界を考えていきたいと念願し、美術資料の収集や展覧会を通じて「房総の美術」の解明に努めてまいりました。

「房総の美術」は、房総という特定の地域内のみで独自に形成されてきたものではなく、中央の動きと密接な関係を持っていきます。特に、首都圏という地理的条件は、中央の美術の受容を容易にし、また作家の往来を頻繁にしました。それ故に、明治以降西洋美術の振興と伝統美術の革新という近代日本美術の流れは、房総にそのまま導入され、受け継がれて行きます。そして、房総の美術の形成過程において、多くの作家が存在しました。かれらは、大別して房総で生まれ育った人たちと、他県から



都鳥英喜「村の道」

ものです。房総に生まれた作家「房総の美術」の形成において、その体勢を占めたのは、移住して来た作家たちでした。しかし、本来その基礎を築いてきたのは、房総に生まれ育った作家たちの活動であつたことに注目しなければなりません。本稿では、それら房総に生まれた作家たちの中から代表的な物語者に焦点をあて、彼らの果たした役割について簡単に紹介

移住した人たちに分類することができず。本展では、それらの作家の中から、近代の房総の美術史の視点に立ち、日本近代美術史上で活躍した作家、房総の美術の振興に重要な役割を果たした作家、また現在我が国の美術界をリードする房総を代表する作家の作品を展示し、近代美術の創設期から今日に至るまでの房総の美術史を回顧し、日本近代美術史上に房総が果たした役割を紹介し、明日への展望を探ろうとする

まず日本画で特筆すべきは千葉市生まれの石井林響(明治十七〜昭和五年)です。はじめ橋本雅邦に師事し、「西の関雪、東の林響」と称せられました。しかし雅邦の死後、次第に画壇から離れ、昭和元年には大網白里町に移り住み、

南画の画趣をおびる作品を描きました。この大網時代には、内弟子として田岡春径と現在創画会の重鎮秋野不矩がいました。鈴木月潭(明治二十六年〜昭和五十三年)は、正に「房総の美術」の形成に尽力した重要な作家のひとつです。月潭自身の中央画壇での成果はありませんが、昭和六年に県下初の千葉美術会を結成し、その代表として活躍。また昭和二十一年、富取風堂・東山魁夷・加藤栄三らの日本画家らと「新泉会」を起こしています。これらの一連の活動が昭和二十四年の千葉県美術会の結成を生むに至りました。因みに、現在活躍する作家の中にも、渡辺學・時田直善・戸田康一・関主税など房総生まれの作家が多数いることが特徴です。

次に洋画では、佐倉藩士の子として生まれた浅井忠(安政三〜明治四十年)を挙げなければなりません。また浅井の後ろに隠れた存在として、都鳥英喜(明治六〜昭和十八年)を忘れることはできません。都鳥は太平洋画会の設立に参画し、同展に出品する一



上野斌郎「苺畑」

方、浅井と共に聖護院洋画研究所・関西美術院で後進の指導にあたりました。しかし「房総の美術」の形成という視点に立てば、柳敬助（明治十
四〇大正十二年）・大野隆徳（明治十九〇昭和二十年）・菅谷元三郎（明治二十八〇昭和二十一年）・浅井真（明治三十二〇昭和五十五年）など旧制千葉中学校の一群の画家たちがいます。彼らは、同校の図画教師であった堀江正章に学びました。その他、春陽会で活躍した今関啓司（明治二十六〇昭和二十一年）・石井光楓（明治二十五〇昭和五十年）や、朱葉会の渡辺百合子（明治三十七〇昭和四十三年）、永くフランスに滞在した原勝郎（明治二十二〇昭和四十一年）なども重要な作家達です。

彫刻では、房総の宮彫師の流れの中で小倉惣次郎（弘化

二〇大正二年）が登場しますが、小倉の作品で房総に定着しているのは宮彫だけで、近代彫刻家としての作品は皆無と言わねばならないでしょう。しかし宮彫の伝統は、木彫として大川逞一（明治三十二〇平成四年）・安西順一（明治四十二〇平成六年）に受け継がれました。現在でも、長谷川昂や堀川恭などの木彫家が活躍しています。木彫以外の活動は、昭和に入り隆盛を極め、今日では多種多様な作家の活躍が目まぐるしくなっています。

工芸では、日本の近代工芸史上に功績を残した多くの作家を輩出しています。その筆頭は、金工の香取秀真（明治七〇昭和二十九年）と津田信夫（明治八〇昭和二十一年）と思われる。香取が伝統的な追求をめざしたのに対し、津田はヨーロッパの新様式を積極的に取り入れ好対称の流

れを形成しました。この他、我が国の七宝の先駆者のひとりの清川惣助（弘化四〇明治四十三年）や、最初の民間ガラス工場である岩城硝子製造所（現、岩城硝子株式会社）を設立した岩城滝次郎（安政四〇大正四年）、染織で官展・紅騎会で活躍した上野斌郎（明治二十八〇昭和四十七年）、東陶会の設立に参画した土肥刀泉（明治三十二〇昭和五十四年）などの名を房総生まれの作家として挙げるべきです。

最後に書は、篆刻部門の石井雙石（明治六〇昭和四十六年）をはじめ、中台青陵（明治四十三〇昭和六十二年）、外口静葉（明治三十二〇昭和四十五年）、今関脩竹（明治四十二〇平成元年）などの数多くの作家がいます。しかし特筆すべきことは、香川松石（弘化二〇明治四十四年）が基礎を築いた書道教育で、今日全国でも屈指の書人口を有する県になる原動力となつています。その間、原天外（明治三十八〇昭和五十八年）、高澤南総（明治四十四〇平成四年）などをはじめとし、移住作家の浅見喜舟などの活躍も重要な役割を果たしています。



大川逞一「聖観音」

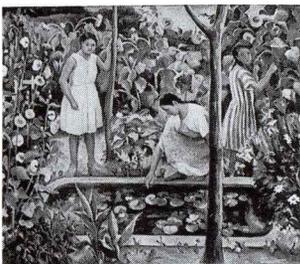
◎展覧会について

本展に出品する作家の選考にあたっては、次の六名の選考委員を委嘱しました。
植村鷹千代・香取忠彦
田宮文平・弦田平八郎
中村傳三郎・細野正信

（敬称略・五十音順）
この委員の推薦・選考を経て出品作家が決定されました。なお出品作品については、物故作家は、原則的に本館収蔵作品の中から出品することとしましたが、未収蔵の作家の作品については調査の上発見に努め、今回はじめて公開される作品も数十点含まれています。また現存作家は、作家自身に三点の自薦をお願いし、その中から出品作品を選定させていただきました。一作家一点の展示を基準とし、版画のみ複数展示を行うこととし、総数として作家数三〇一人（物故作家一二人、現存作家

一八九人）、展示作品数三二〇点が決定されました。これにより、「房総の美術」を総覧することのできる展覧会となっております。
開館時間
午前九時〜午後四時三〇分
（入場は四時まで）

入場料
一般七〇〇円（四〇〇円）、
高・大学生四〇〇円（二五〇円）、小・中学生二〇〇円（七〇円）
（一）内は二〇名以上の団体料金です。（加瀬綾子）



渡辺百合子「花園に遊ぶ」

常設収蔵作品展

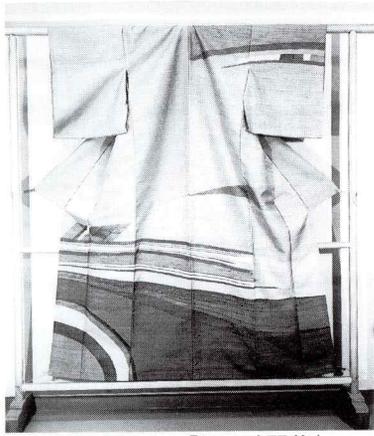
本年度の常設収蔵作品展は、テーマをしぼり、個々の作家が繰り広げる独自の世界や様々な技法の魅力ある表現を紹介しています。

「房総の染織」

11月12日(土)～1月22日(日)

「房総の染織」では、本県ゆかりの作家による染織工芸の世界を紹介します。

館山の唐棧織や外房一帯の万祝、大漁旗などの伝統工芸品とは違った美術工芸品としての染織は、戦後の作家たちの登場により始まります。その代表は二口志保子(明治四十年～平成三年)と青木滋芳(大正三年～平成三年)で、



二口志保子「絨織訪問着」

1月28日(土)～2月26日(日)

二人は斬新な感覚の作品を多数発表し、房総の染織界をリードし続けました。

また、本県出身作家として、佐倉市で生まれ示風会展などで活躍した上野斌郎(明治二十八年～昭和四十七年)の作品も展示します。

「描かれた房総」

11月26日(土)～1月22日(日)

明治以降、房総の地には頻りに画家が訪れるようになり、多くの作品が描かれました。なかでも館山周辺や、銚子、大原、御宿にかけての外房の海岸沿いは、多くの名作が描かれた地として有名です。また、今日でも首都圏下に位置しながら豊かな自然を残すため、格好の写生地とされていきます。その房総の豊かな自然

をはじめ、時代の流れと共に変容した風土や生活、作家が独自の視点で表現した房総の様々な表情を、洋画、日本画、版画の作品により紹介します。

我が国における水彩画は、幕末にロンドン・ニュース特派員として横浜に来往したイギリスのチャールズ・ワグマンによって伝えられました。明治後半には、日本の水彩画を確立するための気運が高まり、水彩画を専門とする画家が数多くあらわれました。

大正期に入り「日本水彩画会」の創立、昭和期には、新たな水彩画団体の誕生と、水彩画技法の研究、開拓がなされ、その表現技法も大きく変わり、今日に至っています。

こうした、明治から昭和までのわが国の水彩画の歴史において、その発展に尽力した作家の作品を一堂に会し、水彩画の変容をさぐります。

「香取秀真・津田信夫の金工」
1月28日(土)～2月26日(日)
明治から昭和にかけて金工作家として、また近代工芸界のリーダーとして、工芸の地位向上に尽力した香取秀真(明治七年～昭和二十九年)と津田信夫(明治八年～昭和二十一年)の作品を展示します。印西町出身で、金工史研究家、アララギ派歌人としても著名な香取秀真は、古典に基礎を置いた格調高い作品を数多く発表しました。

一方、佐倉市出身の津田信夫は、ヨーロッパの工芸の新思潮を日本に紹介し、伝統にとらわれない新傾向の作品を多数発表しました。

後世に大きな影響を与えた二人の作品を御覧ください。

「浅井忠」

3月4日(土)～3月26日(日)

近代洋画の先駆者として大きな足跡を残した浅井忠(安政三年～明治四十年)に焦点をあて、三つの部門に分け紹介します。「浅井忠の作品と資料」では、活発な制作を続けた浅井の日本画、洋画、工芸などの作品と、関係資料を展示し、「バルビゾン派と浅井忠」では、浅井が工部美術学校で多大な影響を受けたバルビゾン派の画風の流れに位置するフォンタネージや、授業の中で紹介されたコロ、ミレーなどのバルビゾン派の作家達の作品と浅井の作品を展示します。さらに、「浅井忠の弟子たち」では、浅井が育てた弟子たちの作品を展示します。浅井は、近代洋画の発展普及のために教育者としても活躍し、安井曾太郎、梅原龍三郎をはじめとする多くの逸材を育てています。

第18回 千葉県移動美術館

本館所蔵作品を、県内二会場で展覧し、より多くの方々に鑑賞していただけるように実施します。本年度の会場は夷隅町文化会館と成田国際文化会館で、特に開催会場となる両市町周辺を描いた作品や、出身作家などを含め、会場周辺の人々により楽しんでいただけるような内容に構成しています。

作品の内容は、日本画・洋画・彫刻・工芸・書・版画の本館所蔵作品を中心に、千葉県芸術フェスティバル行事の第46回県展の県展賞等優秀作品数点をあわせ、約四十点ほどの作品を展示します。

各会場の開催期間等は次のとおりです。

■夷隅町文化会館
夷隅郡夷隅町深谷五六一一
☎077-186-1235
十一月十八日(金)～十一月三十日(水)

■成田国際文化会館
成田市土屋三〇三
☎0475-123-1133
十二月三日(土)～十二月十八日(日)

十二月十八日(日)

美の扉

「夜明け」と「川口」

渡辺 學

「夜明け」

冬の夜明け、ひと気のない魚市場のすみでひっそり鯖を樽づめしている女がいた。

写生しようとそっと近寄ってみると、その指は白く血の気もなく、熱心に水仕事をしている。

手袋をはめて襟巻をした俺が恥ずかしいほどだったが、背中を丸めて働いているその娘さんをよく見ると、親戚の校長先生の末っ子で、一昨年漁業家へ嫁いだ女だった。

苦勞知らずで育ったあの娘がよくもここまで……

そっと気づかれないようにその場を離れた思い出がある。以上は「夜明け」の作品の画因について、ある美術雑誌に寄せた一文で、画面中央のかがむ人物がそれで、その後何年もたたずにこの娘は亡くなってしまった。

数ある私の作品の中で特に印象深い作であるし、またこの絵ほど画面構成で苦しんだ作も珍しかった。

魚や人物や小道具の部分は



「夜明け」 1976

早くにまとまったが、後背の空間処理には手がかりがつかめず、その空白に私自身の心の投影のつながりが出てこないうえ展観メ切りの時間に追われ、夜も寝つかぬ程だった。作因の情感の深さで、心の整理がなされない儘作画に入った為と思う。

この漁場に産まれ育ち、この地の人々の心情やなりわいと、風物を全て知りつくしているという思いあがり、観念的な絵作業により安易に制作してしまう結果と思いい知らされた私にとつての、貴重な作品である。

「川口」

昭和三十五年（一九六〇）

銚子利根川口の高台に一基の海難漁民慰霊塔が建ち、その袖に建つ記念碑のレリーフ原画を漁業関係者に依頼された。作品は、底曳、大縄、揚繰など漁業各種の人物で、働く人々にモデルになって貰って、構成した絵で仕上げた。

当時、天下の三大難所とされた利根川口は度々の遭難事故をくり返し、漁民の犠牲と遭難の悲しみは絶える事のない日々だった。

私自身は野次馬の単なる傍観者に過ぎなかったが、新しい遭難の弔う紫煙の絶え間ない悲劇のドラマは、私の心の中に記憶としてだけ存在する訳には自身の感性が許さなかった。

私にとつて銚子の波は、海は、風や、岩は、生き物になっていた。亀裂の入ったような銀灰色の空の下、船腹を引き裂きゆらぐ山仙丸の残骸とその上をひつつこく鳴き飛び交う鷗の残酷な風景は、それにつらなる堤防の上

を右に左に、遺体を求めて、夫や父や子の名を叫び続けて走り回る遭難の悲しみの姿と共に、私の目に耳に沁みこんで、どうしても描かずに居られなかった。

これらの作品が土地の人々と関連をもって持続していくことの充足感が、生き甲斐を感じさせて呉れる。

砂を抱いた潮風に身を晒し、登る朝日に照り輝き、沈む夕日に影を落とすであろうこの海難碑が海神の怒りを静めて再び悲劇のなからんことを切に祈る。

また拙作「川口」がこの土地の人々と関連をもっていくことの充足感は、私に生き甲斐を感じさせてくれる。

（日本画家・銚子市在住）



「川口」 1976

美術講演会



平成六年度第一回美術講演会は特別展「イタリア・謎と神話」の会期中の五月二十八日（土）午後二時より本館講堂で行いました。講師は美術評論家の井関正昭氏を迎え「イタリアの近代美術の特色」という演題でした。イタリアの近代美術のはじまりから、未来派の誕生と形而上絵画・一九〇〇年代派・抽象主義・彫刻の発展・戦後の展開など作品のスタイルをまじえ、イタリア美術の特色が語られ大変興味深い講演でした。第二回・第三回は、特別展「房総の美術―昨日から明日へ―」の開催に伴い次のように企画しています。

○第二回 七月三十日（土）午後二時 演題「房総と画家」講師 篠崎輝夫氏（県美術会理事長・日展会員）

○第三回 九月十日（土）午後二時 演題「房総の書と現代」講師 田宮文平氏（書道評論家）

*いずれも会場は本館講堂で参加者数は二〇〇人を対象としています。聴講料は無料で当日先着順です。

ごあんない 実技講座 (9月以降)

情報資料室だより

◇情報資料室では、全国の美術館・博物館、大学・学会等の研究施設で発行されている年報・研究紀要・館報の製本化を進めています。また美術雑誌のバックナンバー、千葉県的美術関係資料の製本も同様に行っています。閲覧希望の資料については係までお申し出ください。

【美術館実技講座】

◆彫刻講座

白御影石を素材として、おもに抽象作品を制作します。基礎的な石彫用具の取扱い方をはじめ、立体作品の表現方法について学習します。

講師 石橋 亘氏
定員 15名
締切 8月18日(木)

会期9月1日(木) 2日(金)
3日(土) 6日(火)
7日(水) 8日(木)
9日(金) 10日(土)
13日(火) 14日(水)
(10日間)

◆陶芸講座

陶磁器の見方や、用具の取り扱い方、釉薬の調合、成焼の方法などを、茶碗、花器、食器などの制作を通して学習します。

講師 鎗田和乎氏
定員 30名
締切 10月4日(火)

会期10月18日(火) 19日(水)
20日(木) 21日(金)
11月22日(火) 29日(火)
12月7日(水)
(7日間)

◆書芸講座

書の見方や歴史をはじめ、半紙を用いて、漢字やかなの臨書の基礎を学習します。

講師 中村象閣氏
定員 25名
締切 10月26日(水)

会期11月9日(水) 10日(木)
11日(金)
(3日間)

◆金工講座

銅板を素材として、脂台やタガネの作り方、金属の着色などを交え、鍛金の基礎をレリーフにより学習します。

会期1月18日(水) 19日(木)
20日(金) 21日(土)
24日(火) 25日(水)
26日(木) 27日(金)
28日(土) 31日(火)
2月1日(水) 2日(木)
(12日間)

講師 小林正利氏
定員 15名
締切 1月5日(木)



金工講座

《申込み方法》

往復はがきに希望講座名、氏名、住所、電話番号を明記のうえ、美術館普及課までお申し込みください。なお、定員を越えた場合には抽選となります。

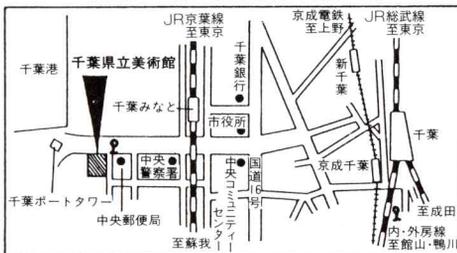
●購入図書のご案内
◇今年度に入り、これまでに房総ゆかりの作家に関連した古書を中心に、左記の図書と雑誌を購入しました。どうぞ御利用ください。

- 作品集
- 「画集 小川千甕」「芋銭」
- 「小茂田青樹画集」「中澤弘光作品集」「加藤源之助作品集」
- 「碎巖画譜」「自治斎画譜」「藤田嗣治画集」「満谷翁画譜」「芋銭子 林響 恒友小品画集」
- 美術評論・技術書
- 「高木背水伝」「有島生馬選集」「岸田劉生とその周辺」
- 「櫛書房草筆」「櫛六十三記」
- 「フェノロサと明治文化」
- 「流離の灯」加藤栄三追想集
- 「美術工芸品の保存と保管」
- 美術雑誌
- 「絵画叢誌」六十三冊
- 「雑誌 明星 第一次(復刻版)」創刊(百号(終刊))
- 「月刊 民芸」一〇七〇号揃

◇また、特別展「房総と美術」に関連して、房総の美術に関する図書や展覧会図録を揃えております。併せて御利用ください。

〈交通案内〉

- JR総武線「千葉駅」より「千葉ポートタワー」行バス15分「美術館・郵便局前」下車徒歩1分
- JR京葉線「千葉みなと」駅下車徒歩8分



◇開室日 火・金曜日(祝日・休館日を除く) 十二時三十分～四時三十分。なお、貸出し、コピーサービスは行っていません。